

日本スポーツ社会学会会報

Sport Sociology

第21号

目次

第8回学会（広島）大会のご案内	1
編集委員会からのお知らせ	4
事務局からのお知らせ	5
理事会の記録	5
国際社会学会・スポーツ社会学会の報告	7
98' ソウル国際スポーツ科学会議の報告	12
掲示板	14
故アンジェイ・ボール教授追悼文	15
住所・所属変更	16

日本スポーツ社会学会
Japan Society of Sport Sociology
事務局：奈良女子大学 1998.10

日本スポーツ社会学会第8回大会の案内

I. 開催要項

1. 主催 日本スポーツ社会学会
2. 後援 広島体育学会、(財)広島県体育協会、エネルギー文化・スポーツ財団 マツダ財団、(財)久保スポーツ振興基金、みんなのスポーツ全国研究会
3. 主管 日本スポーツ社会学会第8回大会実行委員会
4. 日時 1999年3月26日(金)、27(土)
5. 会場 広島アステールプラザ
広島市中区加古町4-17 (244-8000)
広島市の真ん中、平和公園のすぐ傍にある公共施設を使います。大学外で行う大会は始めてですが、地の利をいかし、原爆資料館や夜の原爆ドーム、昔風飲み屋街など合わせてお出かけ下さい。
6. 日程 現時点でのプログラムです。
(1) 総会とスポーツ社会学教育の情報交換等の時間帯を頭に、(2) 一般発表は1人20~30分で12~15題 (3) 2日目の終わりを少し遅く (4) 会員外の人も出やすい時間設定を考えています。状況に応じ変えます。

3/26

12:00	14:00	15:00	17:10 ~ 18:40	19:00	20:30
受付・理事会	総会	シンポジウム I	特別講演	懇親会	

3/27

9:00	10:00	13:00	14:00	16:30
情報交換	一般発表	昼食	シンポジウム II、III	

7. 大会参加および研究発表の申し込みについて

大会参加および研究発表申込書に必要事項を記入のうえ、指定された期日までに申し込んで下さい。

- (1) 参加申し込み締め切り日
1999年12月21日(月)
- (2) 送付先

〒739-8524 東広島市鏡山1-1-1

広島大学学校教育学部東川研究室内

日本スポーツ社会学会第8回大会実行委員会事務局 宛

TEL&FAX(0824)-24-7153

大修館書店

〒101-8466 東京都千代田区神田錦町3-24 電話03-3294-2221代

価格は税別です。

大修館書店創業90周年記念出版

民族遊戯大事典

大林太良・岸野雄三・寒川恒夫・山下晋司 編集
文化人類学・スポーツ人類学の新進・ヘテラン執筆陣95名の力作を納め、多数の貴重な写真を駆使した、見て、読んで、楽しい事典。
▼新判 800頁 本体 9,800円

テニスの源流を求めて

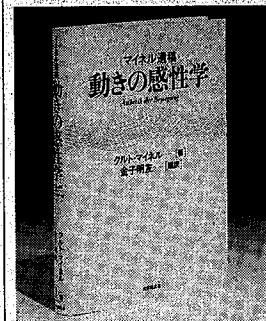
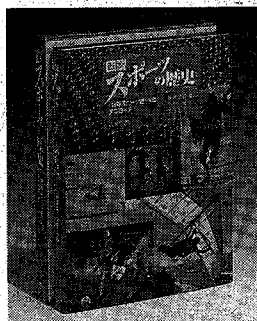
表 孟宏 編著
謎の多いテニスの源流解明に光をあてた、関係者希望の書 / 未だ不明なテニスの起源と源流を解明した基本的な外国文献7篇を初邦訳。「日本への伝来も加えて集大成」
▼A5判 400頁 本体 4,200円

マイネル遺稿 動きの感性学

クルト・マイネル 著 金子明友 編訳
動きの感性教育の重要性と必要性を説いた遺稿を、生誕百年を記念して運動学の第一人者が世界に先駆けて邦訳。
▼A5判 100頁 本体 2,900円

図説 スポーツの歴史

《世界スポーツ史》へのアプローチ
稲垣正浩・野々宮徹・寒川恒夫・谷釜了正 著
人間にとってスポーツとは何か。歴史的視点からその「現在」と「世界性」を問う。オールカラー
▼B5判 204頁 本体 18,000円



体育学講義シリーズ

スポーツ社会学講義

森川貞夫・佐伯慶天 編著
▼新判 206頁 本体 1,900円

現代社会とスポーツ

P.C.マツキントッシュ 著
寺島善一・岡尾恵市・森川貞夫 編訳
▼A5判 240頁 本体 1,748円

現代スポーツ批判

大野晃 著
▼四六判 204頁 本体 1,600円

日本的 スポーツ環境批判

中村敏雄 著
▼四六判 200頁 本体 1,600円

現代スポーツ論

「スポーツの時代をどうつくるか」
中村敏雄・出原泰明等々力賢治 著
▼四六判 200頁 本体 1,600円

スポーツ産業論

松田義幸 著
▼A5判 200頁 本体 2,600円

(3) 参加費

- ①会員：5,000円
- ②学生会員：3,000円
- ③懇親会費：2,000円（会議室内でのビアパーティーを考えています）
- ④申し込みと同時に、同封の振り込み用紙（郵便振替）にてご送金下さい。

郵便振替 口座番号 01340-1-57308
口座名称 スポーツ社会学会実行委員会

8. 研究発表について

- (1) 個人研究の発表は、原則として日本スポーツ社会学会の会員に限ります。
- (2) 研究発表の持ち時間は、各題につき質疑応答を含めて30分以内としますが、発表者数によって時間調整を行います。
- (3) 発表のために、スライド映写機、OHP、VTR、その他の機器の使用を希望される場合は、参加・発表申込書の該当欄に記入してください。なお、当日発表資料を配付される方は、各自70部以上持参してください。

- ①抄録原稿の体裁
- ・原稿は和文で作成してください。印刷製本のため、ワープロ等で作成し、論題、発表者名、所属を原稿の冒頭にお入れ下さい。
 - ・一題につき、A4版用紙2枚、40×40（論題、発表者名所属を含む）上下左右の余白マージン15mm以上とし、横書きにしてください。

- ②原稿提出
- ・締め切り日 1999年2月5日（金）
 - ・送付先 参加申込みと同じ。
 - ・抄録原稿を送付する際には、印刷した原稿とともに、フロッピーディスク（ラベルに使用機種名およびソフト名を記入してください）をお送りください。

9. プログラムについて

個人発表の申し込み受け付け後、抄録集とプログラムを、参加申し込みの手続きをされた方に発送いたします。発送は2月下旬を予定しています。

10. その他

宿舎は、大会会場内のホテルを大会事務局で50人分は確保するつもりです。必要な方は参加申し込み用紙に必要事項を記入のうえ、お申し込みください。なお、数に限りがありますので先着順となります。また、同施設が青少年利用を優先するため外される場合があります。その場合は市内の施設を紹介させていただきます。大会会場は徒歩10分でホテル街に近く他のホテルも種々あります。期待に添えない場合もありますが、よろしくご了承ください。

大会事務局幹旋宿舎 広島アステールプラザ
一泊朝食付き 約6000円

II. 大会キーワード、特別講演および公開シンポジウム

＜大会キーワード＞

「潤い（癒し）」「臨床」「競いあい」とし、メインテーマを「スポーツへの新たなる期待」とします。スポーツ社会学研究者と他分野の研究者、市民とのディスカッションの中からユニークな視点、現場にいきるアイデアが一つでも二つでも見つげられることを期待し、以下を企画します。

＜特別講演＞

- 1. 日時 1999年3月26日（金） 17:10～18:40
- 2. 会場 広島アステールプラザ 大会場
- 3. テーマ 「臨床哲学からみる身体／スポーツ」
- 4. 講師 養老孟司氏（東京大学名誉教授／広島市立大学特別講師）
- 5. 趣旨 解剖学から都市や文化を論ずる軽やかな知と「唯脳論」などというユーモアも合わせて披露してもらいたい

＜公開シンポジウム＞

《シンポⅠ》

- 1. 日時 1999年3月26日（金） 15:00～17:00
- 2. 会場 広島アステールプラザ 大会場
- 3. テーマ 「潤い／臨床／競いあいースポーツへの新たなる期待」
- 4. パネリスト
児玉克哉（三重大学／日本平和学会理事／「平和を学ぶ」等）
亀山佳明（龍谷大学／スポーツ社会学／「スポーツと日常生活にみる滑走感覚」等）
本間三和子（筑波大学／シンクロナイズスイミング五輪代表／交渉中）
- 5. 趣旨 スポーツへの人間の接し方が変わりつつある。潤いの場として、身体接触のツールとして、勝敗よりも競い合いのコミュニケーションとして。一方で平和への希い、性の再生への期待もたかまる。異なる臨床感覚からスポーツを論じてもらい、共に考えたい。

《シンポⅡ》

- 1. 日時 1999年3月27日（土） 14:00～16:30
- 2. 会場 広島アステールプラザ 中会場
- 3. テーマ 「地域再生とスポーツへの期待」（仮題）
- 4. パネリスト 経済学者、民間のスポーツプランナー、スポーツ社会学者等をシンポジストに迎えます。
- 5. 趣旨 土曜日の午後であり、しかも第4土曜のシーズンオフ。関係する一般市民、行政マンの来場を期待したい。地域づくりにおけるスポーツ社会学の可能性を異領域とのディスカッションから得たい。

《シンポⅢ》

- 1. 日時 1999年3月27日（土） 14:00～16:30
- 2. 会場 広島アステールプラザ 中会場
- 3. テーマ 「人間再生とスポーツへの期待」（仮題）
- 4. パネリスト 外国人研究者、社会学者、民間ボランティアリーダーをシンポジストに迎えます。
- 5. 趣旨 学校体育関係者の参加を期待したい。スポーツによる人間形成論を現場感覚の中で確認し、これまでの限界と新たなるとらえ方を探りたい。

編集委員会からのお知らせ

- ・「会員の研究業績」リスト作成データご提出のお願い

会員各位

「会員の研究業績」欄を作成するに当たって皆様のデータをご提出いただきたく、下記にその要領などを付してお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

記

- 1) 対象期間：過去5年以内（1993年以降）に公刊された印刷物とします。
- 2) 提出方法：①著書・編著、②論文、③翻訳、④調査報告書の4部門に分けてご提出ください。

*①の論文については、下記の「10の下位部門」の別をお知らせください。具体的には、論文に下記の番号または下位部門名を書き添えてください。

- | | |
|------------------|-------------|
| (1) 理論・学説・思想 | (2) 研究方法 |
| (3) パーソナリティ・社会心理 | (4) 文化 |
| (5) 集団・組織 | (6) 教育 |
| (7) 政治・経済・労働 | (8) 社会変動・歴史 |
| (9) 社会問題・社会計画 | (10) その他 |

- 3) 上記1)、2)の書式を厳守くださった上、お手数ですがA4サイズの内紙にご記入ください。（これを原稿として作表しますので、今回はメールによるご提出はご遠慮下さい）。

- 4) 期限は編集作業の都合上1998年11月30日までとさせていただきます。

- 5) ご郵送は下記にお願いいたします。

〒194-0298

町田市相原町4342 法政大学内

日本スポーツ社会学会 編集委員会

平野秀秋

付記：英文アブストラクトのページ分離とホームページの開設にともない、業績の英文表記をどうするかという問題がありますが、なお編集委員会で詰めたいと考えますので今回は従来通りとさせていただきます。これに関しご意見等ありま

したらあわせてお聞かせ下さい。

- ・『スポーツ社会学研究』第6巻に関するお詫び
上記研究誌の表表紙、中表紙、131ページに『アメリカスポーツと社会—批判的洞察』の翻訳者 深沢 宏会員のお名前が脱落していました。
また、この巻の奥付の発行日が1997年3月20日となっていました。1998年の誤りです。これらは最終校正に当たった私の不手際による見逃しです。同研究誌第7巻にもお詫びと訂正を掲載する予定ですが、この場を借りて深くお詫びし訂正をさせていただきます。

編集事務局 平野秀秋

事務局からのお知らせ

1. 名簿作成について

今年度中に新たな名簿を作成するため、そのご案内文と返信用のはがきが同封されています。案内文をよくお読みいただき、締切日までにぜひご投函くださいますようお願い致します。この新たな名簿をもとに、都道府県・専攻分野を明記した理事選挙名簿を作成する予定です。

2. 第5期（平成11-12年度）理事選挙の実施について

先の理事会において、3月の学会時に開催される新旧理事会の懸案事項をあらかじめ検討し、理事の新旧交替を円滑に進める意味から、次期理事選挙を来年1月末までに実施することが了承されました。そこで、新しい名簿の作成を遅くとも今年中に済ませておく必要がありますので、名簿作成及び選挙実施に関する会員の皆様のご協力をよろしくお願い致します。

理事会の記録

第4期 第4回 1998年9月20日 13:30-16:00 於大手前女子学園

参加理事：井上俊（会長）、宮内孝知（理事長）、江刺正吾（事務局長）、平野秀秋（編集委員長）、森川貞夫（研究委員長）、佐伯聰夫（国際交流委員長）、杉本厚夫、亀山佳明、小椋博、山下高行、菊幸一、リー・トンプソン、荒井貞光（ob.学会大会関係）、川西正志（ob.共催シンポ関係）、松田恵示（ob.会報関係）

○報告事項

1. 編集委員会の報告

平野委員長より、「スポーツ社会学研究第7巻」の投稿及び編集作業が例年通り進行しているとの報告があった。また、第6巻の校正ミスについてのお詫びと訂正があり、これについて改めて掲載するとの報告があった（その他、詳細は編集委員会報告を参照）。

2. 研究委員会の報告

森川委員長より、学会広島大会におけるシンポジウムの内容等について検討したが、成案を得られていないので審議事項にしたいことと、課題研究等についての研究活動については現在検討中であるとの報告があった。また、中国国家体育運動委員会のメンバーが11月に来日予定であるが、これを機会に学会として研究交流を深めたいとも考えており、この対応についても審議事項にしたいとの報告があった。

3. 国際交流委員会の報告

小椋理事より、7月26日～8月1日にカナダ・モントリオールで開催された世界社会学学会と、それと同時に開催された国際スポーツ社会学学会（ISSA）大会の様子が報告された（詳細は、別記報告を参照）。また、8月20～22日に韓国で開催されたソウル国際スポーツ科学会議に日本スポーツ社会学学会から1名の招待講演者の推薦依頼が井上会長宛にあり、委員会で協議した結果、宮内理事長を推薦し、派遣したことの報告がなされ、これを了承した。

4. 事務局の報告

江刺事務局長より、会報20号の表紙及び広告掲載のミスについて、その事情説明とお詫びがあった。次に、菊理事より、会計の収支並びに庶務的な状況について報告があった。また、次期（第5期）理事会選挙の方法について、その時期や被選挙人になれない理事の確認、名簿の発行及び整理方法等が報告され、若干の検討の後、これを了承した（詳細は別記事務局からのお知らせを参照）。

5. その他

杉本理事より、学会のホームページと国際スポーツ社会学学会のそれとのリンクが日本学会からの一方向になっているので、国際スポーツ社会学学会の方からもリンクできるように交渉しているとの報告があった。

○審議事項

1. 日本体育学会との共催シンポジウムについて

審議資料として、日本体育学会第50回記念大会構想検討特別委員会（小林寛道委員長）

からの資料及び体育社会学専門分科会事務局長の川西会員からの説明をもとに、テーマ及び今後の対応について審議した。テーマについては、すでに委員会から提示されている中から「地域スポーツ活動」「高齢者の健康と運動」「障害者スポーツ」「スポーツとメディア」「地域開発とスポーツ」の5つを仮に選定し、今後の対応については研究委員長である森川理事を窓口として委員会でさらに検討することとした。なお、第50回記念大会は、東京大学本郷キャンパスにおいて10月7日～11日の日程で行われる予定である。

2. 第8回学会大会・広島大会の概要について

広島大会実行委員長荒井会員より、別記大会案内（案）をもとにした説明があった。シンポジウムの演者の選定、一般発表充実のための時間枠の設定など、なお若干の検討事項は残されているものの、今後さらに検討を加えた上で公表することです承した。

3. 第9回学会大会の開催地について

関東地区の私学を中心という案が出され、東海大学を中心に開催を検討していくことです承された。

4. その他

1) 次期（第5期）理事役員選挙の体制について

選挙管理委員会を次期被選挙権のない山下、菊各理事によって構成し、1月末までに行うこととした。

2) 中国国家体育運動委員会の来日メンバーへの対応について

スポーツ社会学学会として正式に組織的な対応を行うことは現時点においては考えないが、モラル・サポート程度の支援・協力は惜しまない。もし正式に組織的な対応を必要とする事項がある場合には、理事長から各理事に書面会議等で審議するようにする。

3) A. ボール（A.Wohl）氏の追悼文について

国際スポーツ社会学委員会の創世期のメンバーであり、日本のスポーツ社会学にも影響を与えたポーランドのA. ボール氏の追悼文を会報に掲載することとし、森川理事が担当することになった。

国際社会学学会・スポーツ社会学学会(モントリオール大会)の報告

‘98国際社会学学会（ISA）・国際スポーツ社会学学会（ISSA）大会報告

小椋博(香川大学教育学部)

1998年7月25日から8月1日まで、カナダ・モントリオールで上記の学会が開

催されたので、報告します。今年の国際スポーツ社会学会大会は単独開催ではなく、国際社会学会大会（4年に1回）との共催でした。

① 国際社会学会大会および国際スポーツ社会学会大会

1 今回の統一テーマは、「社会学的知：遺産、挑戦、展望」で、会長講演や全体シンポジウム、それに各研究分野もこのテーマを基に発表が行われました。

2 国際社会学会（ISA）に登録されている50の研究分野が一堂に集まって、会長講演、発表、シンポジウム、ポスターセッション、ワーキンググループ・セッション、アドホック・セッションと内容は実に多彩でした。これまで国際社会学会の使用言語は、英語、仏語、スペイン語でしたが、これからはドイツ語も加わるようです。益々通訳、翻訳が大変です。ドイツ（語）の社会学への貢献は誰も疑いませんが、第2次世界大戦の影響でこれまで、使用言語としてみとめられてきませんでした。しかしドイツの社会学はドイツ語でしか真に伝達・理解できないと言う理由で、仏語、スペイン語、英語の場合と同じように、公用語になります。例えばフランスの社会学はフランス語で読め、とアラン・トレヌは言っております。日本の（スポーツ）社会学研究を、日本語で発表できる日は来るでしょうか。なおスポーツ社会学は研究分野の第27番目に登録されています。レジャーの社会学は、別の独立した研究分野になっています。

3 参加者は世界の102カ国から約5,000人、発表演題数は約2,500、日本からは全体で136人が参加しました。私がスポーツ社会学以外の分野を覗いた中では、飯島伸子さん（都立大学）達の環境社会学セッションにはたくさんの聴衆が集まって、アジアの環境問題には、世界からも関心が寄せられているようでした。

4 スポーツ社会学分野では、約100の発表があり、基調講演は、カナダのブルース・キッドが「スポーツと人権」のテーマで話をしました。日本からは13人の参加者（うち8人の発表）があり、日本のスポーツ社会学研究の紹介にはいい機会でした。学会発表に関しては他の参加者が報告されますので、以上にとどめます。

② 国際スポーツ社会学会（ISSA）理事会報告

学会大会が始まる前日の25日に一日かけて、理事会があり、沢山の事柄が討議されましたが、要点だけを報告します。なお鹿児島大学の岡田さんが理事会にオブザーバーとして出席しました。

1 会員の増加。96年登録会員は29カ国、141人だったが、97年は33カ国、179人に増加した。98年には200人を超す予定。

2 各国でスポーツ社会学会が設立されている。北米、日本、韓国、イギリス、フランス、ドイツ＝オーストリア、アルゼンチン、ブラジル、イタリアなど。従ってISSAはこれらの各国スポーツ社会学会の現状、活動状況を把握するため、調査をする予定。

3 日本スポーツ社会学会のホームページを紹介し、これを通して日本の情報を得てもらうよう、要請した。各理事は大変興味を持って見ていました。ついでに、各国学会もホームページの作成を急ぐよう、要請しました。

4 会費の値上げ。98年度まで年会費は一律に50ドルでした。99年から今度のモ

ントリオールでの国際学会の参加費に導入した、国の経済状態に応じたランク別会費とすることが決定されました。その結果、日本、北米、ヨーロッパなど多くの国が含まれているAランクの国の会員は、99年からは10ドル値上げの60ドル、韓国などのBランクの国は10ドル値下げの40ドル、中国などのCランクの国と学生会員は30ドル値下げの20ドルとなります。

5 IRSS（国際スポーツ社会学評論）は、昨年から英国のSAGE出版から刊行され、徐々に評価も上がってきています。昨年では、図書館の購読など会員以外の購読が600部（このうち日本からは46の購入）に達し、経済的にも余裕が生まれはじめました。引き続き、機関購読をお願いします。

6 その他の報告

- ・99年中に、新理事の選挙。
- ・新しく、優良論文表彰、優良学会発表賞を設ける。
- ・来年からの学会開催地の予定。（多くの方の発表をお願いします。）
 - 1999年 ハンガリー・ブタペスト
 - 2000年 オーストラリア・ブリスベーン（オリンピック科学者会議と共同）
 - 2001年 未定（ドイツか南アフリカを検討中）
 - 2002年 オーストラリア・ブリスベーン（国際社会学会と共同）
- ・現在ISSAの日本人会員は約30人ですが、もっと多くの方の加入を、お願いします。そして発表と、投稿も。

モントリオール世界社会学会大会に参加しての印象記

山下高行(立命館大学産業社会学部)

帰路まさか全面禁煙になるともつゆしらず、採点や業務の慌ただしさを何とかクリアしてNW52便に乗ったのは7月24日であった。この夏、カナダモントリオールで開催された世界社会学会大会、そのなかのResearch Committee 27, スポーツ社会学部門に参加することとなった。今年学会結成50周年となるアニバーサリー大会。それを記念し統一テーマとしてSocial Knowledge: Heritage, Challenges, Perspectives. が設定され、著しく変化する現代社会の中で、この学問の過去の総括と展望とを含んだ議論が各部門で行われた。スポーツ社会学も例外ではない。オープニングセッションでは、Sociological Knowledge of Sport: Heritage, Challenges, Perspectives. というテーマ設定がなされ、ここでもこの領域を振り返る試みが行われていた。

さて今回の大会の特色は二つあるように感じられた。一つはこのような反省的試みがテーマとして俎上にのぼったこと。これには地域ごとにまとめられた膨大なペーパーが用意されていた（冊子として刊行されています）。もう一つ、これはスポーツ社会学のセッションに限る話となるが、日本の研究者がかってない規模で、各セッションで活躍していたことである。スポーツ社会学の部門では全部で23のセッションが設けられたが、数えてみるとそのうち8つのセッションで日本の研究者が報告（7演題）、あるいは議長（4セッション）を務めるといった状況であった。こんなことを特筆するのは、急に愛

国心に目ざめたわけではなく、ようやく私たちの研究が（少なくともその水準が）認知され、同じ水準でダイアログが開かれつつあるなと感じたことを伝えたかったからである。オープニングに続く統一シンポジウムでは、小椋氏の司会のもと、各国の報告にまじって菊氏がThe Changing Sociological Knowledges of Sport in Japanという表題のもと、日本のスポーツ社会学の歴史と現状を報告し、随分と注目を集めていたのもこのような状況のもとでと言えよう。おそらくこういう良い関係が築き上げられつつある



のも、積極的な対話の機会を意識的に確保しようとしてきたからではあるまいか。学会大会や様々な大学で海外研究者を何とかやりくりして招聘し続けたことや北米スポーツ社会学会に会員諸氏が毎年苦勞して参加してきたことが大きいように思える。

会場を見回せば、昨年私たちの学会大会に来たマツガイア氏は、思えば国際スポーツ社会学会の会長 (!) であつたし、かと思えば国際シンポに来たイギリスのホーン氏やカナダのグルノウ氏が精力的に研究を報告

している。振り返ればソウル大のリム教授やアメリカのジャネット・ハリス氏がセッションの議長を務めている。ロビーでも食堂でも彼らは会えば話しかけてくるし、何度も食事を一緒にとり、様々な議論（結構シビアな一但し果敢にも単語が繋がればいいと言う水準ですが）を行う間柄になっている。このような土台が築かれてきていることは次の若手世代には大切な財産になると感じられた。

さて学会を通してみた研究動向についてはいくつも考えさせられるところがあつた。全てを述べる余裕もないのでここでは二つのセッションについて感じたところを報告したい。一つはSporting Subcultureである。ここでは菊氏と今度来日予定のパート氏（ベルギー）の司会によりWindsurfing Subculture, Women Bodybuilder（最近流行のテーマの感があるが）、及び小谷氏の報告によるE-Boat Movementなどが報告された。ここで焦点となっていたのは、変容する社会の中でこれらの持つ文化装置としての意味や位置であつたように思える。これらの報告はある意味でデュフラン、ポシエロ両氏がフランス社会の変容の中で捉えたカリフォルニア・スポーツの分析と重なり合う面が見えた（『変容する現代社会とスポーツ』参照）。この事は、私が司会を務めたSport and Powerのセッションで報告された、グルノウ氏のところの院生アヌック氏の議論と結びついていた。彼女の報告の要点の一つは、文化装置として捉える際、現代スポーツの焦点はディシプリンと言うことではなく、そのものまたはそれを取り巻く、それを通して産出されるディスクールの分析の中にこそあるというものであつた。実はこの視点は、さまざまな意味で教育制度から離脱しつつある今日のスポーツを見ていく上では必要な視点となる。アヌック氏はこの視点のもと、モンリオールを事例とし、文化装置としてのスポーツを介在し、そこで都市空間がどのようなノスタルジアを産出するか、その機制を分析した。同時に重要であると思つたのは、このノスタルジアがグローバル・キャピタリズムの蓄積過程に与していくことを指摘した点であつた。この報告の後、グルノウ氏がほとんどアジ演説と見まごうほどの激烈な報告を行ったが、これ

に対しかなりいたフロアからは、ローカリティの中に抵抗（resistance）の拠点はどこに見いだせるのか。結局はグローバル・キャピタリズムに包摂されていくのではないかと云々、という熱気をはらんだ議論が展開された。実は先のsubcultureの論議もここに関わる。議論の中でsubcultureの意味は、変容するシステムのほころびの中で、異なる論理を提示するなどを通して何らかの面でresistする所に見いだされているように思えた。この面で私の中には両者の見ているところにつながりを見いだせたのだが、問題はグローバリゼーションを（グローバル・キャピタリズムの展開を中軸に）この中でどのように見ていくかということではなからうか。イギリスやアメリカの報告に私が若干感じた、この面の現実的な批判感覚の鈍さに対し、カナダやブラジルなどの研究はこの点での先鋭的な批判の側面を有していることを伺わせた。グルノウ氏とこの点についても話したが、おそらく半従属国、周辺国にこそ現実的にグローバリゼーションに伴う矛盾が鮮烈に現れてきているからとも言えよう。グルノウ氏は現代スポーツの一つに規定として、Media Productsという側面をあげている。もちろんこれのみに終始しないが、そうであるならばメディア資本の分割と集中が進みつつある状況の中で、文化装置としてのスポーツの分析は、一国的視点にとどまるわけにはいかなくなるであろう。カナダやブラジルの研究には、自国の状況をもとにしたそのような感覚が生成しつつあるように感じた。翻ってみれば、先の総選挙を見る限り、日本でも同じ様な状況が生まれつつあるのではなからうか。そんなことを、急に全面禁煙となり、なすこともない機中で考え続けた。

第14回世界社会学会に参加して

岡田 猛（鹿児島大学教育学部）

御多分にもれず、勤務校でのここ数年間というもの、文部省からの絶えることのない「改革・改組」要求への対応に埋没してきてしまった。一体どれだけの時間が全国で空費させられたらうか。こんな状況から一歩でも回復したいという気もあり、今般の学会に参加することにした。ついでに何か発表できるものはと身の回りを引っかき回して、8年程前の日本体育学会での発表を焼き直すことにした。日本の大学運動部のコンパで見られる先輩から後輩への”おごり”が部のハイアラーキー的構造を支持する一要因になっているのではないかと、という内容である。質問が2点出されたが、案の定よく聞き取れなくて当たらずともさわらずの返答になってしまった。しかし今回の目的は上記のような気楽なものであり、気にすることなく、ヒアリングの修練と学会の雰囲気を楽しむことができた。小椋さんに頼んで理事会に終日オブザーバーとして参加させていただき、耳を慣らすことができた。今回の世話人であるLaberge先生宅での晩のパーティーまでも一緒にさせていただき、いろんな人達と親しく話をする機会がもてて、これは予想外の収穫であつた。

紹介されたホテルが会場から徒歩で数分と至便な位置で、昼休みの2時間程は帰って仮眠をとることさえできた。おかげで大会期間7日中、開会式から閉会式までへこたれずにヒアリングの練習に精出すことができた。日本から出席したスポーツ社会学関係者

も多く、このことを含め、また先般の京都での国際学会の開催実績等もあり、理事会でも注意を引いていたようである。なかには堂々とした発表ぶりの方もおられ、留学する余裕のない慌ただしい大学院生活をおくった小生などにとり羨ましい限りであった。

1週間後にアメリカ、ボストンで開催された世界哲学会にも参加し、スポーツ哲学部門にも足を運んだが、参加者数、演題数、地域的広がりにおいてはスポーツ社会学の方がかなり先んじている印象を受けた。世界社会学会は、前回ドイツ・ビーレフェルト大会からの連続出席であった。4年毎に開催されるこの学会大会の魅力のひとつは、各種の専門社会学会が一堂に会するため、他のいろんな社会学分野の様子を覗いてまわれることや、内容の理解はともかく、覚えのある学者の話をはかにかに聞けることであろう。前回はギデンズ、今回はウオーラスティンからおおいに刺激をうけた。

紙面を費やしたついでにひとつの提案をさせていただきたい。先述したように、国際学会での困難はなんといってもヒアリングである。質問の主旨がつかめたら答えはなんとかなる。そこでどうでしょうか、同僚の発表にはできるだけ参加してあげ、質疑ではお互いに援助しあうということにしては。ちなみに、これをルール違反だとか目くじらをたてるような学会はありそうもない。

98' ソウル国際スポーツ科学会議の報告

98ソウル国際スポーツ科学会議体験記

宮内孝知(早稲田大学人間科学部)

本年度のSeoul International Sport Science Congressは、8月20-22の日程で、ソウル・オリンピック記念公園内のオリンピック・パークテルを会場に開催された。本年は、ソウル・オリンピック開催から10周年にあたり、それを記念するシンポジウム、キーノート・スピーチで幕を開け、哲学、歴史、社会学、教育学、レクリエーション・レジャー研究、スポーツ・フォア・オール等々13分科会で132の研究発表が予定されていた。

本学会員では、研究発表をされた菊幸一氏、松田恵示氏をはじめ、松村和則、江刺正吾、山下高行、川口晋一の各氏が参加された。会長の林繁蔵先生によれば、日本、中国を中心に約40名の海外研究者の参加であるとのことであった。

さて、以下は小生のきわめて「私的な」、初めての海外国際会議体験記である。

確か6月の下旬であったろうか。国際交流担当の小椋理事から、韓国体育学会会長の林先生より井上会長宛に、ソウルでの国際会議で、日本のスポーツ産業について何方かに発表して頂きたい旨の連絡があり、スポーツ産業学会にも関わっている小生が参加しては如何か、との電話を戴いたのは。

小生は、大の飛行機嫌いである。高所恐怖症では決してないが、飛行機は嫌いである。英語も得意ではないどころか、からしき駄目である。しかしながら、他の方を推薦できずにいる内に、引き受けざるを得ないことになってしまった。

了承はしたものの、招請状は来ず、どのようなセッション(初めはシンポジウムでとの情報であった)で何をどれ位報告するのかも判らず、気にはなるが日々の諸雑事に追われている内に、7月も半ばを過ぎてしまった。突然に、フルペーパーを月末までにEメールで送るよにとのこと。月末には、日本スポーツ産業学会の大会開催も控えており、忙しい。どうしよう。

慣れない和文英訳に四苦八苦しなながら、締切りを1週間程遅れて、原稿を送ったその晩、突然の胸の痛みで病院に収容される始末であった。ソウルに行けるのだろうか、上手く報告できるのだろうか、またまた胸が痛む。小椋理事や菊理事から、カナダでの学会で林先生からアジアスポーツ社会学会立ち上げの話があり、ソウルでも当然その話が出るであろうから、たとえ私的な参加であるとしても、理事長として迂闊な発言をしてはならぬとのアドバイスを胸にソウルに向かった。

小生の報告は、スポーツ社会学分科会アジア・セッションの中での「アジア諸国におけるスポーツ産業:現状と展望」での、中国、日本、韓国かの報告で、それは他に4つの事例研究で構成されていた。具体的な数値を示したのは、小生の報告だけであり、この分野では、日本が研究の主導となるべきであることを、事後の質問や雑談の中からも、強く感じた。

その夜の、韓国研究者との公園内のレストランでの夕食会、テラスでの缶コーヒーによる懇談会では、日本の文化、スポーツの制度等が話題であり、アジア・スポーツ社会学会の話題は出ずに、小生は「お話しうかがいましたが、帰国して理事会で検討させて頂く問題です」を心で英訳しながら、どことなくホッと、「I have done my duty」と繰り返していたのである。

ソウル国際スポーツ科学会議に参加して

松田恵示(岡山大学教育学部)

8月20日から22日まで、韓国の首都ソウルで開かれた「98ソウル国際スポーツ科学会議」に参加してきました。「Sport Sociology」と題された分科会では、「Body and Sport Experience in Capitalist Society」「Sport Industry in Asian Countries: Trends and Prospects」「Sociological Perspectives of Modern Sport」の3つのセッションが用意され、韓国、中国、台湾、日本、アメリカ、フランスといった国々の研究者が熱心に議論を交わしていました。

発表や議論を聞いてですが、特に韓国や中国の研究者の方々は、現実的なスポーツ政策立案に役立つデータや内容に、興味や関心を強く持たれているな、ということが強く印象に残りました。発表においても、例えば文化社会学的視点からの報告等は、ほとんどありません。もっとも、ぼく自身の発表をめぐっては、語学力の不足から十分に内容を伝えることができないままに終わってしまい、そういった点について、より突っ込んだお話をうかがうことが出来ませんでした。少し残念だったのですが、次の機会にはもう少し議論できればと、会場を後にしました。

人口の1/4が集中する大都市ソウルの街並は、日本の都市のそれと比べると

ろがありませんでした。ちょうど夏休みだったこともあって、家族を同伴していたのですが、人ごみにまぎれ地下鉄やバスに乗り、繁華街や娯楽施設を中心に、ソウルの空気を思う存分味わうことができました。そういったソウルの日常的な光景の中に、まさにさまざまに現象するスポーツの具体像をメモしながら、改めてスポーツという文化が持つ、近代との「共進性」のようなものを強く感じた4日間となりました。

掲示板

・西日本スポーツ社会学研究会の報告

今年も、8月25、26日の夏休み期間中に、広島県呉市において、西日本スポーツ社会学研究会が、13名の参加者によって開かれました。個人報告、課題研究、座談会等、幅広い内容で、熱心な討論が深夜におよんで続けられました。

来年度の開催予定、今年度の研究会内容等、その他研究会についてのお問い合わせがありましたら、香川大学・小椋博(Tel 087-832-1432、e-mail: komuku@ed.kagawa-u.ac.jp)までご連絡下さい。

*この「掲示板」のコーナーでは、研究会、講演会、お知らせ、お願い等、研究活動に関する情報交換の場として、会員のみなさまからの記事をお待ちしております。奥付にあります事務局・会報担当のところまで、記事をお寄せいただけますようお願いいたします。

去る9月1日、ポーランドのスポーツ社会学者ヴォール教授の訃報を報せる第一報が西垣完彦会員から入った。続いて夫人のマグダさんから「二回目の脳発作の後に死が訪れた。彼は最後の数日間は非常に苦るしんだけど、最良かつ価値ある時を持つことができた。彼にとって非常に重要な仕事であった意識についての本を完成させることができなかったことは誠に不幸であり、彼にとっては大きな失敗であろう。」と記した手紙が届いた。

彼は1966年にユネスコ・国際スポーツ社会学委員会創設時の会長を勤め、国際スポーツ社会学評論の初代編集長としても長く活躍し、ロシア語、ドイツ語、英語、フランス語を自由に話すことができた国際的に著名なスポーツ社会学者の一人であり、かつ日本びいきの研究者であった。ICSSの創設に際してはユネスコを舞台に西側では竹之下休蔵先生をはじめLuschen, Loy, Kenyon教授等と親交を結び、東側ではポーランドはもとより旧東独のErbach(後のスポーツ大臣)、旧ソ連のMilstein教授をはじめとする多くの研究者を組織しながら精力的に活動した。後にその功によりユネスコの国際体育・スポーツ評議会(ICSPE)のノーエル・ペーカー賞を受賞した。

とくに日本には1978年秋に日本学術振興会招聘教授として約二か月滞在、その間、東京、愛知、京都、大阪、広島などを訪問し、多くのスポーツ社会学の研究者との交流を深めた。さらにその後も1979年のワルシャワでの国際スポーツ社会学セミナーをはじめとして、日本の研究者にとっては彼が国際的なスポーツ社会学界との窓口となってくれたことはいつまでも記憶に留めておきたい。彼のスポーツ社会学に関する著書・論文はおびただしい数に上り、いずれくわしい紹介もあるかと思われるが、唐木・上野氏の翻訳による『近代スポーツの社会史』(ベースボールマガジン社、1980年刊。ドイツ語版における本来のタイトルはDIE GEMEINSCHAFTLICH-HISTORISCHEN GRUNDLAGEN DES BÜRGERLICHEN SPORTSである)に見られる方法論は、日本におけるスポーツの社会史的研究に少なからぬ影響を与えた。



在りし日のWohl教授(左)、真ん中はLuschen氏、右はKenyon氏

住所・所属変更

氏名	住所	TEL・FAX	所属
山下高行			
大山幸成			新十津川町教育委員会
前田和司			
高橋義雄			名古屋大学総合保健体育科学センター
佐藤利明			岩手県立大学総合政策学部
荒井貞光			広島市立大学国際学部
野崎武司			
須田直之			

河原和枝

大野木龍太郎

長見真

依田充代

山下孝文

了海論

・退会者

荒川勝彦

安昌圭

奥野卓司

角知行

安田国臣

編集後記

今号の「理事会の報告」にもありましたように、前号20号におきまして、表紙ならびに広告掲載のミスを生じ、会員のみなさまにご迷惑をおかけしましたことを、ここで重ねてお詫び申し上げます。今後は、以前にも増して慎重に編集ならびに発送作業を行いたいと思っておりますので、ご容赦いただけますようお願い申し上げます。

さて、会報中にもご案内がありましたように、来年の3月に広島で行われます第8回学会大会の概要が決定いたしました。実行委員会の先生方のご苦勞は耐えませんが、学会参加や研究発表の活性化をもって、そのご苦勞に応えることができればと願います。どうぞごゆっくりと大会内容についてご覧下さい。(K. M)

日本スポーツ社会学会会報 第21号

平成10年10月31日発行
日本スポーツ社会学会事務局
(奈良女子大学文学部内)

●学会への連絡、および入退会、住所・所属変更、会費納入、その他各種手続きに關しましては以下までお願いいたします。

日本スポーツ社会学会事務局
〒630-8263 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部内

事務局長 : 江刺 正吾 ☎/FAX 0742-20-3346
E-mail : esashi@cc.nara-wu.ac.jp
庶務・会計 : 菊 幸一 ☎/FAX 0742-20-3347
E-mail : kiku.ko@cc.nara-wu.ac.jp

郵便振替口座番号 : 00390-0-43962
加入者名 : 日本スポーツ社会学会事務局

●会報への投稿に關しましては以下までお願いいたします。

〒700-8530 岡山市津島中3-1-1 岡山大学教育学部

会報担当 : 松田 恵示 ☎/FAX 086-251-7666
E-mail : matsuda@cc.okayama.ac.jp

入会申し込み書

(※事務局へご返送願います)

ふりがな	会員種別 (どちらかを○印で囲む)
氏名:	正会員・学生会員
紹介者:	専門分野:
(推薦人) ※必ず明記してください	
勤務(所属)先:	
勤務(所属)先住所: 〒	
TEL () FAX ()	
連絡先住所: 〒	
TEL () FAX ()	
E.mail:	

平成10年3月発行

曾凡輝・王路徳・邢文華 他著／関岡康雄 監修・譚 璞 訳

スポーツタレントの科学的選抜

A 5判 予価 4000円

中国のスポーツが世界的に躍進したのはなぜか？
タレントの科学的選抜に焦点を当て、その歴史的経緯、選抜方法、組織管理等について詳細に分析！ 日本スポーツ界への提言の書!!

[目次]

- 第一章 中国におけるスポーツタレントの科学的選抜の概観
- 第二章 スポーツタレント選抜の科学的基礎
- 第三章 スポーツタレント選抜の手順
- 第四章 スポーツタレントの科学的選抜の指標と評価基準
- 第五章 選抜指標の測定網則
- 第六章 スポーツタレントの科学的選抜の組織と管理

平成10年3月発行

身体教育のアスペクト

身体運動文化学会編

A 5判 予価 2200円

- | | | |
|--|---|---|
| <p>第1章 スポーツ
スポーツの思想
スポーツと心身
スポーツの歩みと今
現代社会とスポーツ
生涯スポーツ
女性とスポーツ</p> <p>第2章 武道
武道の思想
刀剣の思想
武道のあゆみ
 武道概略
 剣道史</p> | <p>柔道史
弓道史
現代社会と武道</p> <p>第3章 舞踊
舞踊のあゆみ
舞踊の思想
現代社会と舞踊
現代の舞踊</p> <p>第4章 身体運動の心理
身体運動の心理学的意味
障害者とスポーツ
加齢と身体運動
スポーツ競技の心理
スポーツ傷害の心理</p> | <p>第5章 身体運動の生理
身体運動のためのエネルギー
身体運動を支える生理機能
身体運動に影響を及ぼす因子
身体運動にかかわる課題</p> <p>第6章 体力とトレーニング
体力
体力トレーニング</p> <p>第7章 健康と運動の理論
命と健康
身体と健康
健康と運動処方</p> <p>第8章 コーチング論</p> |
|--|---|---|

トランポリン・シャトル競技

塩野 尚文 著
本体 2000円

トランポリンとは

- I. トランポリンの歴史
- II. 器具
- III. 特徴と価値

トランポリン・シャトル競技

- I. トランポリン・シャトル競技の私たち

- II. トランポリン・シャトル競技の歴史
- III. トランポリン・シャトル競技の競技規則
- IV. 種目の制限（なぜ、38種目なのか）
- V. 練習の進め方
- VI. シャトル競技のための実戦訓練
- VII. 競技内容の実際
- VIII. 参考資料
- IX. 種目の図解と説明

〒171 東京都豊島区高松 2-8-6

道 和 書 院

TEL (03) 3955-5175
FAX (03) 3955-5102

日本スポーツ社会学会編

二五〇〇円

変容する現代社会とスポーツ

経済、文化のグローバル化の中でスポーツの意味が再び問われ始めた。世界の研究者が京都会議で熱く語ったスポーツの行方とは――

井上 俊編

二〇〇〇円

新版 現代文化を学ぶ人のために

映画、音楽、文学、ジャーナリズム、旅行、恋愛、ファッション、スポーツなど、多様な側面から時代のドラマを照らし出す「現代文化論」

杉本厚夫編

一八九三元

スポーツ・ファン・の社会学

「観ているのか」「魅せられているのか、それとも「視られている」のか」「スポーツファンの視線からスポーツ文化を読み解いた注目作

ジャネット・リーヴァー 亀山佳明・西山けい子訳

二二三三元

サッカー狂の社会学

●ブラジルの社会とスポーツ ワールドカップを四度制覇したブラジル・サッカーの強さの秘密を社会学の視点から考察した貴重な一冊

杉本厚夫

一八九三元

スポーツ文化の変容

●多様化と画一化の文化秩序 現代社会における文化装置としてのスポーツが発信するさまざまなメッセージを多様な視点から読み解いた好著

伊藤公雄・牟田和恵編 1800円

ジェンダーで学ぶ社会学

「生まれる」から「死ぬ」までの身近なできごとを問いなおし、そこにひそむ「性差」の圧力を浮き彫りにする、ユニークな社会学のテキスト

J. フィスク 山本雄二訳 2600円

抵抗の快樂

ポピュラーカルチャーの記号論

既成の意味の上に独自の意味を創出する民衆の姿をとらえたカルチュラル・スタディーズの好書

黄 順姫 2800円

日本のエリート高校

学校文化と同窓会の社会史

名門高校はいかにしてエリートを生み出してきたか。その身体文化の形成・変革・継承を捉える

岡原正幸 2300円

ホモ・アフェクトス

感情社会的に自己表現する

抑圧的な感情統制から抜け出て、自律した感情生活を自分たちの手で築き上げたい人びとのために